

【書評】

大嶋栄子 著
『傷はそこにある—交差する逆境・横断するケア』
(日本評論社, 2024年, 四六判, 296頁, 2,400円+税)

空 閑 浩 人
(同志社大学)

本書に掛けられた「帶」にある言葉（本書の内容を紹介する言葉）が、今日求められるソーシャルワークのあり方を端的に示している。

過酷な境遇をアディクションと共にどうにか生き伸びながらも、「見えない存在」にされてきた女性たちが安全でいられる場所をつくる—〈越境〉と〈横断〉のソーシャルワーク、その軌跡と現在地。

ソーシャルワークの実践は、生きるうえでの何らかの困難を抱えながらも、どうにかここまで生き延びてきた人々と出会うことから始まると言える。そのような人々の多くは社会的に排除され、孤立状態を強いられ、社会からは「見えない存在」に追いやられている。したがって、まずは、本人にとっての安全で安心な場所、自らが大切にされる場所や関係を人々に提供することが、生活とその立て直しを支えるソーシャルワークの役割として重要である。

そして、今日人々が直面する生活問題や困難は、社会状況の影響を受けてますます多様化、複合化、複雑化の様相を呈している。そのような困難を抱える人々への支援活動として求められるソーシャルワークは、様々な法制度、サービスの枠を越境し、分野や領域を横断するかかわりや働きかけの実践なのである。

さて、本書は、「さまざまな被害体験を背景に、

精神的不調や障害を抱える女性」への支援に長年取り組んできた著者が、自身のNPO法人での活動の経験を通して発表した多くの論考を1冊の本としてまとめたものである。本書の全体を通して、著者の言葉である「ソーシャルワークの面白さ、ソーシャルワークが対象とする困難を抱える人が生きていくことの過酷さ、しかし、同時に、人とその環境とが相互に織りなす作用により、それでも生きていくことの尊さ」(9-10頁)が伝わる内容である。

本書は3部構成となっている。

まず、第1部の「交差する逆境—愛着・トラウマ・アディクション」は、「第1章 安全基地をつくる」「第2章 逆境を生きる」「第3章 傷はそこにある」「第4章 通過型支援が行き詰まる」「第5章 ハームリダクションという実践—環境に介入する」「第6章 愛着形成をどう支えるのか」の6つの章から成る。

逆境の中にある女性たちへの支援として、「安全基地」をつくることの大切さと同時に、支援の現場でそのような女性が抱える困難、女性であるがゆえの困難を支援者が捉え、支援の方向性を見出すことの難しさも語られる。たとえば、「プロローグ」にあるように、暴力を受けるような環境にある女性について「『暴力を受ける自分に問題があるのだ』と思われる関係性が暮らしの中に張りめぐらされている。だから暴力被害について誰かに話すのは私たちが想像するほど簡単ではな

い」(4頁) のである。

だからこそ、人々への支援として、その困難の背後にある社会課題や社会構造的な問題の認識と、当事者だけでなく当事者を取り巻く環境へ介入するソーシャルワークの必要性と役割の重要性が考えられなければならない。

特に、第4章で著者も指摘しているように、2020年からのコロナ禍で生じた非正規雇用者の減少、DV相談の増加、自殺者数の増加に占める女性の割合の多さが、いかに女性が不安定な生活を強いられてきたのかを表したものであったということ、そしてそれは現在もそうであることを私たちは忘れてはならないのである。

次に、第II部の「横断するケアージェンダーと居場所のポリティクス」は、「第7章 居場所をめぐる問い合わせジェンダーについて知るところから」「第8章 愛を期待はしない－ケアとジェンダーの視点から」「第9章 ねじれる援助希求－ケアの両義性」「第10章 抑圧の連鎖に立ち向かう－反抑圧的ソーシャルワーク」「第11章 “食べる”というケア」の5つの章から成っている。ここでは主に、支援者に必要とされるジェンダーへの視点やジェンダー感覚に関連する論考を展開している。そしてその関連で、昨今の日本でも注目されつつある「反抑圧的ソーシャルワーク」の議論も取り上げている。さらに「ケア」という言葉につきまとう問題や課題とそれに関する考察もなされている。

第7章に、「困難を抱える本人の中に深く浸透してしまった『自己責任』の罠をほどく作業と、今後の希望に向け行動していくエネルギーをチャージする作業を進めなくてはならない」(110頁)とあり、当事者を苦しめる「自己責任論」の価値観とそこからの脱却が必要であることが主張される。そして「エネルギーをチャージする作業」として、たとえば第11章では、女性たちは「助けて」が言えない状況を経て、著者たちによる支援の場に辿り着くとして、次のように述べられている。

しかし私たちは、「ここが絶対に嫌でなけ

ればそれでいい」と言う。「仕方ないか」くらいの消極的な理由で援助関係がスタートできれば十分だ。まずは、ご飯を食べよう、そして自分のベッドで眠るところから始めないかと伝える。(161頁)

その当事者本人にとって、少なくとも「嫌ではない」場所のなかで、まずは食事をして睡眠をとること。そのような安心で安全なケアと支援があつてはじめて、前を向いてこれからを考えることができる。ソーシャルワークで言われる「生活問題解決」やそのための「支援計画作成」以前のこととして、あるいはそれらの前提として、まずは今日を生きるその営み自体が守られなければならない。そのような場所と時間のなかで、今後の希望に向けた行動へのエネルギーが蓄えられるのである。

そして、第III部の「堀の中と外はつながるのか－女子刑務所プロジェクト」は、「第12章 再犯の意味を問い合わせ続ける」「第13章 『女子依存症回復支援モデル』のスタート」「第14章 私について、私が知る」「第15章 自分を受け入れ、現実と向き合う」「第16章 変えられるものと変えられないもの」「第17章 堀の外で－センター修了生と共に“転がる”」の5つの章から成る。

ここでは、女子刑務所での取り組みの紹介を通して、出所後の支援の実際と課題について述べられている。それはまさに、「堀」の中と外をつなげる「越境」や「横断」のソーシャルワークのあり方についての議論である。様々な傷や過去を抱えつつ、時には再犯に至ってしまうこともありながら、当事者たちが現実と向き合い、堀の外でのこれからを生きるために、ともにもがいて「共に転がる」支援のあり方が描かれる。

第15章で、著者は、「彼女たちが自分と向き合うことを回避しようとするのは、怠けているからでも怠るからでもない。自己嫌悪と自己否定というとても大きなおもりをつけていたために、自分の体験をそのままに見て、語ることが難しい」(230頁)と述べる。そして、第17章では、

「待ったなしの困りごとをたくさん抱えていることが、生活するうえでは大きな障害となっているが、知らないことやできないと思われることを本人はとても嫌がる」として、「それは恥ずかしいことであり人に知られたら馬鹿にされると思い込んでいるので、私たちは口癖のように『何かあつたら相談してね』と言うが、彼女たちにとって相談はとてもハードルが高い」と述べている（259-260頁）。

長い間、関係的、環境的、社会的に押し付けられてきた自己嫌悪や自己否定の考えに縛られている人々は、自分のことを誰かに相談すること自体ハードルが高いことであり、ましてやどこかや誰かに支援を求めるとはなおさらのことである。

著者は、第15章で、「今になって振り返ると、私は自分に見えるものだけを見て、彼女たちの困難をわかったつもりになっていたに過ぎなかつた」（226頁）と述べている。この言葉には、支援とは何か、支援者とは何かへの問い合わせがある。そして、第17章で次のように述べている。

途中から彼女たちが陥っているという状況に私たちも巻き込まれてみて、一緒にその風景を見ることにしている。本人に見えている世界を本人の立ち位置から眺めてみると、『言われていることはわかるけど、無理』という気持ちが少し理解できる。彼女たちが変化していくことに対して抱く怖れをこちらも感じるには、一緒に転がってみるしかない。（265頁）

支援とは、本人が陥っている状況に支援者も巻き込まれ、本人と同じ立ち位置から一緒にその風景を見て、一緒に転がることという著者の言葉は、この時代のソーシャルワークに求められる支援観への議論と支援のあり方の可能性につながると考える。

また、本書には、「[counterpoint]『〈越境〉と〈横断〉のソーシャルワーカー交差する困難・横断する援助』」というエッセイと、「ケアの倫理と公共圏の問い」というテーマでの熊谷晋一郎氏と

筆者との対談も収録されている。前者は、既存のソーシャルワークからはみ出す実践や行動を提唱する内容であり、昨今の生活問題の複雑性や複合性とそれに対応できる制度側の変容に向けて働きかけるソーシャルワークのあり方への問い合わせが読者に投げかけられる。後者は、「ケア」や「ケアの倫理」をテーマに、70年代の「青い芝の会」の活動と主張、また人々の生活問題を自己責任ではなく構造の問題として捉えることの重要性などを通して、社会の分断や人々の生活を覆う閉塞感が漂う状況なども視野に入れながら幅広く議論されている。両者とも大変興味深い内容であり、今とこれからソーシャルワークのあり方を考える材料として、本文とあわせて読者に一読を勧めたい。

そして、「傷と共に生きる」という副題がつけられた「おわりに」で、著者は次のように述べている。

これまで女性の依存症について長くフィールドワークを続け多くの傷と向き合ってきたが、女子刑務所で出会った人たちの抱える傷の深さには言葉を失うことが多い。世界に対する不信感と猜疑心、大げさに聞こえるかもしれないが、あらゆる社会の仕組みから弾き出されていると感じながら生きざるを得ない時、人はこうして頑なさと、分かち合うことの難しい哀しみを抱えるのだと感じる。（289頁）

支援の現場でそのような人々と出会い、それでも人々がこれからに希望を頂き、前を向くために、支援や支援者に何ができるのか。以下、著者の言葉である。

たしかなのは、彼女たちの、自分はこの世界から存在を必要とされていないという強い確信を前にできるのは、本当に些細でありふれたことでしかないということだ。だから継続が重要になる。そして傷と共に生きる彼女たちをひとりぼっちにしないこと、誰かが必

ず彼女たちの傷つき、彼女たちがその傷について語り始める際にはその語りに耳を傾けることだ。（中略）彼女たちの傷を忘れないでいること、それはたしかに私にもできることだ。（291頁）

本書の読者は、著者のたくさんの言葉から、

ソーシャルワークの魅力や可能性はもちろん、そしてこれからもソーシャルワークに携わっていくための勇気や元気が与えられるはずである。研究者や教育者はもちろんのこと、とりわけ、日々もがきながらそれでもソーシャルワークをあきらめない実践者や、未来のソーシャルワークを担う学生たちに紹介したい一冊である。